

新型コロナ感染症流行下での日本人のセクシュアリティとカップルの関係性
-2020年, 2021年の調査結果の分析から-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文学部心理社会学科 公開日: 2022-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平山, 満紀, アリス, パッハー メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22708

〔原著〕

新型コロナウイルス感染症流行下での 日本人のセクシュアリティとカップルの関係性 —2020年, 2021年の調査結果の分析から—

平山 満紀¹ アリス・パッハー^{2,3}

要 約

新型コロナウイルス流行下の日本で、人々のセクシュアリティやカップルの関係性がどのように変化したかについて、日本のメディアでは断片的でネガティブな内容の言説が多く現れた。しかし、少数の先行調査、および本研究のおこなった2020年と2021年の調査では、カップル関係の改善が多く起きていたことがわかる。本稿では調査のうち、性的欲求、カップルの関係性、カップルの性関係の3つのテーマに関わる結果を分析する。コロナ流行下での人々の性的欲求の変化は複雑であり、性別、年齢層、パートナーの有無、プライベートスペースの有無が関係していることがわかった。セックスレス・カップルを除いて分析すると、カップル関係とカップルの性関係には強い相関があり、カップルの性関係も改善したカップルが多いことが発見された。

キーワード：新型コロナウイルス感染症流行、日本、カップルの関係性、セクシュアリティ

はじめに

2020年早春以来の、新型コロナウイルス感染症流行にともなう社会活動の制限などの感染防止策は、人々の生活のあらゆる面に深甚な影響を与えてきた。その中で日本では、人々のセクシュアリティやカップル関係にどんな変化が起きているのかに、ほとんど関心が向けられなかった。向けられたとしても、断片的な現象への、特定の視角からの関心だけにとどまった。しかし、感染対策として人々に求められたのは、身体的距離の要請、身体接触

の制限、対面的な出会いと交流の制限、自宅滞在の推奨、という性行動に直結する行動変容であるし、感染症流行のもたらす健康不安、経済不安、雇用不安、子育ての不安等のさまざまな不安も、人々の性意識や性行動に大きな影響をもたらすことが推測できる。新型コロナウイルス感染症流行（以下、コロナ流行と記す）下で、日本人のセクシュアリティ（性意識、性的欲望、性行動）と親密な関係性のさまざまな面に、現実には大きな変化が起きているのではないだろうか。本研究は、この領域

1 明治大学文学部心理社会学科現代社会学専攻准教授

2 明治大学文学部心理社会学科現代社会学専攻助教

3 本稿は全頁共同執筆をした。

でどのような変化が生じているのかという、日本ではあまり問われることはないが重要な問いに、正面から取り組むものである。

本稿ではまず、日本のメディアが、コロナ流行下で日本人のセクシュアリティやカップル関係に関して何を語ってきたのか、広い範囲に受け取られた言説を、時系列に沿ってリストアップしその傾向や特徴を述べる。続いて、コロナ流行下の日本人のセクシュアリティやカップル関係に関する先行調査を顧みる。その後、筆者たちがおこなった2度の調査の概要と結果を示し、分析を論じる。2度の調査は、カップルだけでなく、パートナーのいない人たちにも一部カップルとは異なる質問に取り組んでもらい、実施したのだが、本稿は紙幅の関係でパートナー有の人のみの結果や分析にテーマを限定する。パートナーなしの人の結果や分析については、稿を改めて述べたい。

1-1 コロナ流行とセクシュアリティやカップルの関係性に関する日本のメディアでの言説

本研究の発見を明示するために、日本の多くの人の触れるメディアが、コロナ流行下でセクシュアリティやカップルの関係性に関して、どのような言説を伝えてきたのか、2020年3月から基本的には2021年2月までの期間に関して、主なものだけに限り時系列に沿って顧みたい。

2020年3月20日と3月26日、国連が全世界に向け、感染症で人々が家に籠る状況では、「女性へのDVが増加しやすい」と警鐘を發出し、政府はいち早く対応して、広報やDV問題の相談の24時間ホットラインの開設などをした。このニュースがカップルの関係性に関する言説の最初のものだったと言える。

同年4月10日、小池都知事は、性風俗関連特殊営業の店舗・施設に休業要請した。さらに13日、休業要請の対象は、店舗型に加えてデリヘルなどの無店舗型営業も含むことを明示した。同日経済産業省が持続化給付金の概要を発表したが、4月27日、性風俗関連特殊営業は持続化給付金の対象外と発表し、メディア上にも職業差別を批判する意見などがこの後多く上がっていった。一方4月23日、お笑い芸人の岡村隆史がラジオ番組で、「コロナが収束したらもの凄く絶対おもしろいことある。美人さんがお嬢やります（中略）稼がないと苦しいですから（中略）だから今、我慢しましょう」と発言し、大きな批判が巻き起こった。降板の署名活動も起こる中、岡村は謝罪を繰り返した。性風俗が本質的に不健全なのか、他の職業と同等なのか等に関して、メディア上に多くの言説が表明された。後日コロナ禍での性風俗業界の女性たちの苦境を伝える中村（2020）、坂爪（2021）の刊行もされた。

休校措置がとられた3月以来、予期せぬ妊娠に関する10代からの相談が、女性支援団体などに急増したことを受けて、「緊急避妊薬を薬局で市民プロジェクト」が立ち上がり、2020年7月21日厚生労働大臣に要望書と67,000筆の署名を提出するなど、日本の避妊に関する政策の改善を求める運動を起こした。緊急避妊薬という新しい薬への啓蒙的言説や、誤解に基づく反対意見など、日本ではかつて見られなかったほどの多くの、避妊に関する言説がメディアに現れた。2020年夏ごろからは、10代の望まない妊娠急増が話題にされ、2020年8月の、10代女性の自殺の増加に関連があるという見方も現れて、避妊に関する政策の改善を要求する言説は一層増加した。

「コロナ離婚」は2020年春以来、たびたびメディア

アでは語られる話題となった。自粛生活で長時間共にいることが、夫婦関係の危機を深めるとしばしば言われた。

2020年9月6日、感染症学専門家の忽那賢志がYahooニュースで「Withコロナ時代の安全なセックスとは？」を解説した。これは、専門家による、コロナ流行下での安全なセックスに関する、ほとんど初めての言説だった。欧米では2020年3月21日にNY市保健局が安全なセックスに関するガイドラインを発表した（NYC Health 2020）のを皮切りに、多くの公的機関や感染予防に関わる団体が、安全なセックスについての情報を流しているのと、発信者の少なさと遅さはきわめて対照的である。

このように、日本のメディアではコロナ流行にともない、女性の貧困や風俗産業、予期しない妊娠や緊急避妊薬、DVやコロナ離婚、などの話題に関する言説が大きく現れたと言ってよい。一方、カップル間の性行動やカップル関係の支えになるような情報や言説は、非常に少なかったことが特徴と言える。

1-2 コロナ流行下の日本人のセクシュアリティとカップルの関係性に関する先行研究

北村邦夫が行った「コロナ禍における第一次緊急事態宣言下の日本人1万人調査」⁴は、厚生労働省の助成を受け、20～69歳の9990人の回答を得た、日本人の性行動の変化に関する最も大規模な調査と言える。しかしこれは2020年10月26日～10月29日の調査期間に、2020年3月下旬～5月下旬の緊急事態宣言下の状況を思い出して答えても

らう、遡及的調査である。予想を超えた生活の変化が続いた2020年に、人々は5～7か月前の性生活について正確に想起できただろうか。結果の確実性に疑問が付され则认为る。

とはいえ、結果の一部を示すと、2020年3月下旬～5月下旬には、セックスを経験したことがある者の回答で「セックス頻度」に関しては、男性（4218人）の9.4%が減った、47.1%が変わらなかった、3.9%が増えた、39.5%がしていない。女性（4341人）の6.4%が減った、31.0%が変わらなかった、2.7%が増えた、59.8%がしていない、という結果だった。後に述べる本研究での調査では、セックス頻度は質問項目に含めなかったため、貴重な結果だと考える。

次に、安達知子「COVID-19の流行下における人工妊娠中絶の実態調査」⁵が、2020年の月ごとの全国の中絶件数と妊娠届出件数を調査したところ、2020年の前年同月比の中絶減少率は、近年の平均減少率2.7%に比較して1～9月の平均で12.9%と大きく、特に5～7月は18～20%強と減少率が大きいことが顕著であり、8～9月も減少率は大きかった。メディアで話題にされた、自粛生活での望まない妊娠の増加は、事実とは異なることがわかった。また、妊娠届出数については、近年の日本の出生数の減少は毎年約3%前後であるが、2020年1～9月の妊娠届出数の平均減少率は4.9%で5月、7月の減少は明白だった。

TENGAは、2020年2月～6月各月に20～50代の計960人に、平時と比較したコロナ流行時の、マスターベーションなどの性生活に関する「コロ

4 「新型コロナウイルス感染症流行下の自粛の影響—予期せぬ妊娠等に関する実態調査と女性の健康に対する適切な支援提供体制構築のための研究（研究代表者：安達知子）内の研究」

5 2021年5月15日「厚生労働特別研究・新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に関連する母子保健領域の研究報告シンポジウム」報告資料

ナと性」調査⁶をおこなった。

マスターベーションはやや増加（ゼロ回→月1～2回）した人が多く、セックス回数はゼロになった人が多いことも明らかになった。これはKinsey研究所が2020年3月～4月におこなった調査の結果と共通している（Lehmiller et al. 2020）。

TENGA調査によると、緊急事態宣言中、「セックスが気晴らしやストレス解消になったか」という問いには、男性では「なった」が7.3%、「まあなった」が18.8%、「あまりならなかった」が32.3%、「ならなかった」が12.9%、「1回もしていない」が28.8%だった。女性では「なった」が5.6%、「まあなった」が15.0%、「あまりならなかった」が27.1%、「ならなかった」が9.8%、「1回もしていない」が42.5%の結果だった。北村邦夫の上掲の調査では、「1回もしていない」が男性39.5%、女性の59.8%であるのに対し、TENGAの調査ではこの率が28.8%、42.5%と低く、TENGAの調査は回答者中のセックスに活発な人たちが割合が高いと言ってよい。

続いて、緊急事態宣言中、「マスターベーションが気晴らしやストレス解消になったか」という問いには、男性では「なった」10.6%、「まあなった」27.5%、「あまりならなかった」38.8%、「ならなかった」13.8%、「1回もしていない」10.0%だった。女性では「なった」17.1%、「まあなった」29.0%、「あまりならなかった」30.8%、「ならなかった」13.1%、「1回もしていない」37.1%という結果だった。

セックスやマスターベーションを1回もしていない人も多い一方で、セックス、マスターベーションそれぞれが気晴らしやストレス解消になったと

答える人も、ジェンダーで異なるが、2割～4割以上いることがわかり、男女とも、性行動をしなかった人、性行動をして気晴らしになった人、性行動をしても気晴らしにならなかった人に分かれることがわかる。

さて、日本はAV大国としばしば言われるが、人々のAVやポルノの視聴行動に関する研究は非常に未発達である。しかしコロナ禍でAV配信サイトの方針にも、人々の視聴行動にも、大きな変化が起きたのは事実だ。配信サイトのSODやFANZAなどは、無料見放題のキャンペーンにつづいて定額見放題の方式を導入した。Pornhub Insights (2020) は、世界各国のPornhubでのAVの日々の視聴数を記録しているが、2020年3月には連日、前年同日よりも多くの視聴がなされ、前年同日比10%以上の日もしばしばあったことがわかる。全世界的な傾向だが、コロナ禍の日本でも、AV視聴は以前に増して盛んになっている。

続いて、離婚統計を、人口動態統計月報年計(2021年・厚生労働省)に見る。2020年(令和2年)の離婚件数(概数)は19万3251組、離婚率(人口千対)は1.57。前年の20万8489組より1万5245組(7.3%)減少、離婚率(人口千対)は、前年の1.69より低下した。メディアで言われていた「コロナ離婚」は、もちろん一部にはあったのだが、コロナ流行中に離婚が増えた事実はなかった。

懸念されたDVはどうだろうか。内閣府は国連の警鐘を受け迅速に、2020年4月20日に24時間の電話・メール・チャット対応「DV相談プラス」を発足させた。内閣府「DV相談件数の推移」(2021年 内閣府男女共同参画室)によると、これが多くの相談を受け付けたことがわかる。以前からあ

る「配偶者暴力相談支援センター」が受け付けた相談も、2019年より2020年は10%前後増えた。相談体制が強化されたことと、相談件数が増えたことは確かだが、DVの実数が増えたかどうかは、相談件数から推測することはできない。

2 本研究の調査概要

2-1 調査の問い

コロナ流行と社会的活動制限の中で、日本人のセクシュアリティ（性行動・性意識）と親密な関係（カップル関係）は、どのように変化しているのか。コロナ流行初期と、コロナが定着した時期ではどのように異なるか。多様性を含んだ一般の日本人の現実はどのように変化したか。以上を調査の問いとして、本研究は質問紙調査を行った。

2-2 調査の実施期間・調査方法・実施者

調査1 2020年5月26日-2020年6月7日（第1回緊急事態宣言下）オンライン調査

対象者：全国の10代から60歳までの日本人に募集した。SNS上で募集し無報酬で参加してもらった。全体回答 n=579, 有効回答数n=563

調査2 2021年1月5日-2021年2月15日（第2回緊急事態宣言下）オンライン調査

対象者：全国の10代から60歳までの日本人に募集した。SNS上で募集し、応募者がなかなか集まらなかったため、一部は調査会社に委託してクーポンと引き換えに参加してもらった。全体回答 n=812, 有効回答数n=780

実施者：平山満紀（明治大学文学部准教授）

Alice Pacher（明治大学文学部助教）

研究倫理審査：調査2は、明治大学文学部人を対象とした研究等に関する研究倫理委員会の審査で

承認された（申請番号2019）。

2-3 質問項目

(1) 生活状況（経済的変化、雇用の変化、住まい環境、家族環境、健康状態、感染リスクの認識、心配事）

(2) カップルの関係性、シングルの人が出会いを求める意識、性行動

パートナー有（結婚、恋愛、セフレなど多様な形）の回答者に対して：交際年数、関係性の変化、性生活の変化、性的欲求の変化、マスターベーション、性的行動

パートナー無（シングル）の回答者に対して：新たな出会い/パートナーを求める欲求の変化、性的欲求の変化、マスターベーション、性的行動

(3) 性的行動を通じた感染に対する心配

(4) 自由回答の質問（本稿で分析した質問のみ掲載）

・「あなたの性意識・性行動（性生活）がどのように変化したのかを、自由に記入して下さい（調査1）

・「コロナ流行の間あなたの夫婦（カップル）関係がどのように変化したのかを、自由に記入してください。複数のカップル関係もっている人は、できるだけどちらの関係にも触れてください。」（調査2）

表1、表2に、回答者の属性の結果を示す。

調査1では、交際相手との関係を尋ねる質問中の、「カップル」という語が、回答者により交際相手・夫婦に限るのか、不倫・婚外関係を含むのか、解釈が異なり混乱が生じた。そのため調査2では、カップルという語の詳細な説明を付し、不倫・婚外関係について詳細に聞く項目も付け加えた。

回答者の属性⁷

	調査 1	調査 1	調査 2	調査 2
	N	%	N	%
性別				
男性	224	40.1	317	41.3
女性	323	57.9	404	52.7
その他	11	2.0	46	6.0
年代別				
<19	34	6.0	25	3.4
20-29	183	32.5	255	35.0
30-39	135	24.0	214	29.4
40-49	143	25.4	140	19.2
>50	68	12.1	94	12.9
交際状況				
付き合っている人と同居している・結婚している	265	47.3	298	38.4
付き合っている人はいるが、同居していない ⁸	154	27.5	167	21.5
付き合っていない人はいない	135	24.1	245	31.5
その他	6	1.1	67	8.5

表1 回答者の属性ごとの人数と割合

本論文では、「カップル」は、異性愛、同性愛の、法律婚または事実婚の夫婦および、同居の有無にかかわらず恋人を意味する。セックスフレンドの関係をカップルと呼ぶかどうか、そして、複数の関係をもっている場合主たる関係以外をカップルと呼ぶかどうかは、回答者の判断に任せている。

2-4 本調査の限界および偏り

本調査はいくつもの限界や偏りを免れない。第一に、性生活の自己申告であることに伴うバイアスがある。性生活に変化がある人でも、変化はコロナ流行の影響なのかどうかわからないため「変化なし」と述べる回答者もいる。

調査2のみで尋ねた情報

	調査 2	調査 2
	N	%
性的オリエンテーション		
異性愛者	519	72.0
同性愛者 ⁹	20	2.7
バイセクシャル	51	7.0
パンセクシャル	19	2.6
アセクシャル	6	0.8
わからない ¹⁰	90	12.5
その他	16	2.2
交際状況		
結婚していてそのほかに恋人・不倫相手もいる	50	6.4
オープン・リレーションシップ・ポリアモリー	17	1.5

表2 調査2のみで尋ねた属性に関する人数と割合

7 無回答を除いた数であるため、合計数が各項目で一致しない。
 8 別居と遠距離恋愛を含む。
 9 本調査は、性別や性的オリエンテーションなどさまざまな面での性の多様性を前提にして実施したが、紙幅の関係で、本稿ではシスジェンダーで異性愛の回答者に焦点を当てる。
 10 質問項目「性的オリエンテーション」に12%の回答者が「わからない」と回答していることが興味深い。ここでは、「性的オリエンテーション」という用語が理解しにくかったのか、性的オリエンテーションが実際にわからないのか、考察しにくい部分でもある。

第二に、サンプルの偏りのひとつであるが、日本人にはセクシュアリティの話題に抵抗のある人が少なくないが、そのような人たちは参加者には少なかった。そのため、回答者がセックスレスである割合が、日本人の大規模調査に比べて顕著に少ない。比較的に積極的な人や、コロナ禍で性的によい変化を経験した人が参加者には多かったと推測できる。

第三に、これもサンプルの偏りであるが、経済状況の悪化した人は、取り組む余裕がなかったと思われ、参加が少ない。第四に、属性の偏りである。調査2の年齢層20～24歳のほとんどは学生で、社会人が少ない。

このような限界や偏りはあるものの、コロナ流行下でのカップル関係および性関係の研究が少ない日本で、この調査をおこなったこと自体が、本研究のオリジナリティであり、発見的価値は小さくないと考える。

2-5 本調査の展開

比較研究

本調査は海外の2つの研究者グループとの共同研究をおこない、同質問で結果を国際比較している。まず、本調査のもととなる調査をドイツ語圏でおこなったのが、Barbara Rothmüller (Rothmüller 2021) (Rothmüller et al. 2021) とそのグループだが、本調査は彼女に許可を得た上で、一部それと共通の質問を日本語に訳して実施した。2つの社会の比較に関して議論し、その成果を2021年8月ドイツ・オーストリア社会学会¹¹でRothmüller とPacherらがパネル発表した。

次に、ポーランドのKatarzyna Waszyńskaら

のグループとの共同研究を始めた。Waszyńskaらは本研究の調査1の質問項目を、ポーランド語訳して調査を実施した。日本とポーランドの結果の比較研究をおこない、共著論文を刊行した(Hirayama, Pacher, Klon, Waszyńska 2021)。

本調査の報告

本調査の結果や分析は、上記の比較研究の他にも、下のように口頭発表やオンラインでの掲示をおこなった。

- ・2020年9月にAlice Pacher & Maki Hirayamaは、Impact of COVID-19 on Sexuality in Japanというタイトルで、Karlstad University, Center for Gender Studies主催のThe Politics and Intersections of COVID-19: Critical Perspectives from Gender Studies (オンライン)で発表した。
- ・明治大学セクシュアリティ研究所website内「コロナと性」の頁に、2度の調査の単純集計を、日本語と英語で掲載した。<https://sites.google.com/view/coronatosei/>
- ・2021年11月にAlice PacherはBarbara Rothmüller, Igor Grabovacが共同でSigmund Freud Universitätにて開催したポディウム・ディスカッションで発表した。

3 調査結果とその分析

本調査の単純集計一覧は、上述のように明治大学セクシュアリティ研究所のサイトに公表している。そこで本稿では調査結果全体を総覧することはせず、調査結果のうち、性的欲求、カップルの

11 “Sexualität und Partnerschaft in der Corona-Krise in Japan” *Post-Corona-Gesellschaft? Pandemie Krise und ihre Folgen*, Kongress der Deutschen Gesellschaft für Soziologie und der Österreichischen Gesellschaft für Soziologie.

関係性、カップルの性関係の3つのテーマに焦点を絞り、分析したい。

3-1 性的欲求

We' re scared. We' re trapped inside. We' re lonely. We miss human touch. We need sweet, sexual release. これは2020年3月21日にMashableというオンラインマガジンに掲載された記事の一部だ。確かに孤独と不安におののく時、性的な安らぎは解放になりうる。しかしそもそも、性的欲求を減退や消失させる人もいるのではないか。そういう人にはこの安らぎや解放の道もないのではないか。

コロナ禍の状況で性的欲求は喚起されるのか、それとも性的欲求は減退するのか、これは人間の性に関する純粋な疑問である。調査1についての年代別集計結果を見ると、どの年代にも両者がいることがわかる（図1）。

性行動をすることにより、コロナ禍のストレスから安全な避難場所やリクリエーションを得られるのか、それとも、性的欲求を低下させ、性行動による安心を得ることはできないのかは、コロナ禍を生き延びるレジリエンスに関わるとも考えられる。そのどちらに転じるかを定める要因は、一体何なのだろうか。

性的な欲求が増えたか/変わらないか/減ったかが、以下の①～⑥の要素に左右されているかどうか、つまり各要素の後に示した群を比較して差がないかどうかを、カイ二乗検定の独立性の検定をおこなって調べた。

- ① 性別：男性/女性¹²
- ② パートナー有無：パートナー有/パートナー無
- ③ 年齢層：19歳以下/20代/30代/40代/50代以上
- ④ プライベートスペース有無：家にプライベートスペースがある/不完全だがある/ない
- ⑤ コロナ流行に関連した自分の健康への不安：

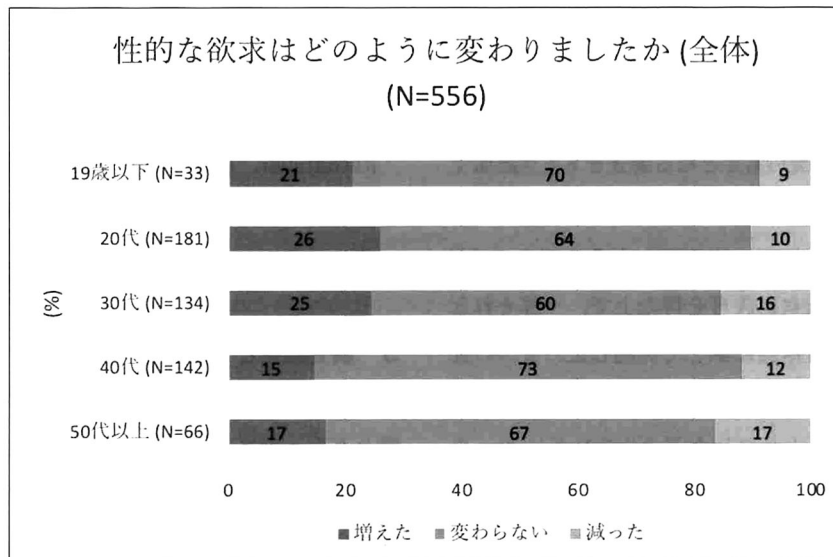


図1 性的欲求の変化 調査1 年齢別集計 (全ジェンダー)

12 両調査でも性別「その他」の選択肢を設けたが、選択したのは少数だったため、統計分析からは省略せざるをえなかった。

まったくない/あまりない/少しある/とてもある

- ⑥ コロナ流行に関連した倒産・業績悪化・失業の不安：まったくない/あまりない/少しある/とてもある

検定の結果を以下に示す。

- ① 性別に関しては、調査1では $\chi^2(3, N = 536) = 64.877, p < .001$, で、0.1%水準で有意差がある。性的な欲求が増えるのは女性より男性に有意に多く、性的な欲求が減るのは男性より女性に有意に多い。
- ② パートナー有無に関しては、調査1では $\chi^2(8, N=380) = 185.707, p < .001$, で、0.1%水準で有意差がある。性的な欲求が増えるのはパートナー有よりもパートナー無の人に有意に多い。
- ③ 年齢層に関しては、調査1では $\chi^2(35, N=380) = 75.216, p < .001$, で、0.1%水準で有意差がある。調査2では $\chi^2(27, N=748) = 54.249, p = .001$, で、1%水準で有意差がある。
- ④ プライベートスペース有無に関しては、調査1では $\chi^2(9, N=380) = 24.141, p = .004$, となり1%水準で有意差がある。性的な欲求が増えるのは、プライベートスペースがある人が、プライベートスペースがない・不完全な人よりも有意に多い。調査2では $\chi^2(9, N = 748) = 66.462, p < .001$, で、0.1%水準で有意差がある。
- ⑤ コロナ流行に関連した自分の健康への不安に関しては、調査1では $\chi^2(6, N = 380) = 11.297, p = .080$, 自分の健康への不安が、まったくない/あまりない/少しある/とてもある、の4つの群で、性的な欲求の変化に関して有意差はなかった。

- ⑥ コロナ流行に関連した倒産・業績悪化・失業の不安に関しては、調査1では $\chi^2(12, N = 380) = 11.776, p = .464$, 倒産・業績悪化・失業の不安が、まったくない/あまりない/少しある/とてもある、の4つの群で、性的な欲求の変化に関して有意差はなかった。調査2では $\chi^2(12, N = 748) = 27.090, p = .008$, 1%水準で有意差がある。

これらから、性別、パートナー有無、年齢層、プライベートスペース有無は、コロナ流行下での性的欲求の変化を左右しうるが、コロナ流行に関連した自分の健康への不安や、コロナ流行に関連した倒産・業績悪化・失業の不安は、性的欲求の変化にほとんどあるいはまったく関係がないことがわかった。今後は調査1と調査2の比較や、今回検定しなかった他の項目に関する検定、ジェンダー別のより詳細な検定にも取り組みたい。

性的欲求はコロナ流行下でどのような要因でどのように変化しているのかを、さらに詳細に追及するために、性的欲求に言及している自由回答を、ジェンダー別・パートナーの有無別に調べる。自由回答中特に、性的欲求の変化の様態を記述したものを選び、変化の要因に言及している回答を赤字で示す。

調査1

【シングル女性】

<性的欲求が減った>ことに言及している自由回答の主なもの

「性欲が減ってしまった気がします。」(20代後半女性) 「性欲がかなり弱くなった」(40代前半女性) 「次第に性欲が減りました」(30代後半女性) 「寂しさを感じるものがなくなったため、性的欲

求は著しく減退した。」(30代前半女性)「コロナ流行以前よりも、暇をうまく活用できるようになり、またストレスが減ったため、性行動への欲求が減ったように感じる。」(20代前半女性)

<性的欲求が増えた>ことに言及している自由回答の主なもの

「性欲が強まった」(20代前半女性)「自粛生活が始まったばかりの頃は性欲がとても高かったが自粛生活に慣れてくると段々と平常になっていった。」(30代前半女性)「性的じゃないものも含めて、人とのコミュニケーションが減ったことによる人恋しさで、性欲と恋人がほしい欲求が増え、以前から気になってたけど行ったことがなかったハブニングバーにハマってしまいました。」(20代後半女性)

ストレスがあり、人とのコミュニケーションが減るなどによる寂しさを感じると、性的欲求が高まる女性がいる、ということがわかる。

【シングル男性】

<性的欲求が減った>ことに言及している自由回答の主なもの

「性的な欲求は減ったと思う」(50代男性)

<性的欲求が増えた>ことに言及している自由回答の主なもの

「家にいると性欲がいつもより強くなるのは感じました。私の場合はコロナの影響などを言われる前にパートナーと別れたので、さみしさから来ているのかもしれませんが、それを抜きにしても、できることが減ると、気持ちを持って余してムラムラしてしまうのかなと思います。」(20代後半男性)

「やたらと性的欲求は強くなりました。常に家において他人の目がないからかもしれません。」(20代前半男性)「この流行の間に、ネットで知り合った人に好意を抱き、性欲が強くなった」(20代前半男性)

他人の目がない状況、できることが減ってエネルギーを持て余す状況や、寂しさを感じる状況で性的欲求が高まる男性がいる、ということがわかる。

【パートナー有女性】

<性的欲求が減った>ことに言及している自由回答の主なもの

「性欲がなくなったが、このままパートナーとセックスをしないことはこの先不安になりそうだと感じている。しかし、感染などを考えるとセックスをする気持ちはなくなる。」(20代後半女性)「会えない期間が長くなりすぎて、会えなくても構わない、セックスしなくても構わないと思ってしまふようになった。コロナ前は性衝動が強かったが、(…) 性的欲求が減った。」(20代後半女性)

<性的欲求が増えた>ことに言及している自由回答の主なもの

「セックスが減ったことでフラストレーションがたまった。セルフプレジャーが増えて性衝動が増えた。」(20代前半女性)「会えない分高まった」(20代前半女性)「不安によって性欲が増した。」(19歳以下女性)

パートナー有女性では、感染の心配は性欲を下げる場合があること、パートナーと会いたくても会えない状況では性欲は高まるという人がいる一方、会えない期間が長くなりすぎると性欲が低下

するという人がいることがわかる。不安も性欲を高める場合があるとわかる。パートナー有女性の自由回答で、「性」という語を使わずに欲求を表した人たちが、欲求に言及した回答の半数ほど似たことも特筆したい。「単身赴任の夫と（…）会える時に密な時間を過ごしたいと思い、積極的になった。」（20代後半女性）「好きな人に早く触れたいという欲求が高まった。」（40代後半女性）などである。

【パートナー有男性】

<性的欲求が減った>ことに言及している自由回答の主なもの

「お互いに仕事在宅になったこともあり、プライベートな時間が取れず、性欲が減った気がする」（20代後半男性）「生活に変化や刺激が無くなったので、性欲が減退したと感じる」（30代後半男性）

<性的欲求が増えた>ことに言及している自由回答の主なもの

「一緒にいる時間が長くムラムラする頻度が高くなった」（30代前半男性）この男性は、カップル関係少し深まった、性関係少しよくなった、を選択している。

パートナー有男性では、パートナーと一緒にいる時間が同様に長くなったとしても、プライベートな時間がとれる場合に性欲が高まったという人と、仕事に追われプライベートな時間がとれない場合に性欲が低減したという人に分かれることが、少なくともこの回答からはわかる。

調査2

【シングル女性】

<性的欲求が減った>ことに言及している自由回答の主なもの

「性欲が減った」（30代後半女性）「以前と比べ性欲その物が全くない」（20代前半女性）「遠距離恋愛の彼氏とセックスしたいばかりだったが、コロナで会えないうちにどうでも良くなって性的欲求も薄れ、別れた。」（20代前半女性）「友人や家族と会えず、心配事が多く、性的関心が減った」（40代前半女性）

心配事が多いため性的欲求が減るという女性がいることがわかる。調査1【シングル女性】の回答で見た、ストレスがあり寂しさを感じると性的欲求が高まる、ということとどう関連するのか、疑問も生じる。

<性的欲求が高まった>ことに言及している自由回答の主なもの

「恋人がほしいとはあまり思わないが、性的な欲求はたまっているし、人肌寂しいと思うことが増えた。深夜テンションでセルフプレジャーのグッズを購入したが、後でちょっと冷静になった。微妙な心境。」（20代前半女性）

【シングル男性】

<性的欲求が減った>ことに言及している自由回答はない

<性的欲求が高まった>ことに言及している自由回答の主なもの

「欲求は高まった」（50代男性）「性欲が強くなってきた」（20代後半男性）「多少興奮するようになった」（19以下男性）「欲求不満になってきた」（20代前半男性）「やる気満々」（40代後半男性）

【パートナー有女性】

<性的欲求が減った>ことに言及している自由回答の主なもの

「お互いに会うことも少なくなり、性欲はかなり減った。かと言って困ってはいない。会ったからといって性欲も以前よりなく、セックスが面倒と感じることも多くなった。」(20代前半女性)「性欲自体が減った。接触できないことか寂しい。」(30代前半女性)「仕事や家事の増加のストレスで性欲が湧かなくなった」(30代後半女性)「性欲が減ったがコロナかどうかはわからない」(40代後半女性)「全く性に関する意欲がわからない」(30代後半女性 (会えなくなった))

<性的欲求が増えた>ことに言及している自由回答の主なもの

「パートナーがコロナを心配して会える回数が大きく減り、私は会いたいので喧嘩が増えた。性的欲求不満の解消のために女性用風呂を2回利用した。一方で将来を考えて結婚話が進み婚約した。」(30代前半女性)「会える機会が減ったから欲が増した」(20代後半女性)

パートナー有女性では、パートナーと別居している場合、会えないために性欲が減るといっている一方、会えないために性欲が増す、という人達もいることがわかる。その双方の条件の違いなどは、この自由回答からはわからない。パートナーと同居し、仕事や家事のストレスで性欲がなくなったと言っている人もいます。

【パートナー有男性】

パートナー有男性の自由記述は、情報が少なく分析ができない。

関係性を成り立たせる原動力のひとつとしての性的欲求について、自由回答欄から、男性、女性それぞれで、コロナ流行下のどのような条件が性的要求を高めたり、低めたりする要因になる場合があるのか、発見できた点もある。しかし女性の中にも「性欲と恋人ほしい欲求が増え、…ハブニングバーにハマった」人と、「コロナで会えないうちにどうでも良くなって性的欲求も薄れ、別れた」人があるなど、性的欲求の変化の方向に個人差は大きく、その差が何に由来するのかは十分明らかにできていない。

今後は心配事、経済的变化、雇用の変化との関連で見ると分析を進めたい。あるいは、性的欲求とはもっと繊細で、統計的な把握などは難しいものなのだろうか。

3-2 カップルの関係性および性関係の変化

3-2-1 カップル関係の満足度

コロナ流行に伴う自粛生活によって、カップル関係及び性関係にもさまざまな変化が見られる。調査1では、コロナ流行の間にカップル(夫婦)関係が深まったかどうかを聞いた。その結果、調査1では、「変化がない」(46.8%)が最も多く、次いで「関係性が良くなった(とても深まった+深まった)」(42.5%)、そして「関係性が悪くなった(少し悪くなった+悪くなった)」(10.7%)が最も低い。(図2)

調査2では、「変化がない」という選択肢をさらに分けて、「もともと良くて変化はない」「もともと良くも悪くもなく変化もない」と「もともと悪くて変化はない」の選択肢で尋ねた。結果は、「もともと良くて変化はない」が36.8%でもっとも多く、次いで「カップル(夫婦)関係が深まった(深まった+少し深まった)」が33.2%、「もともと良

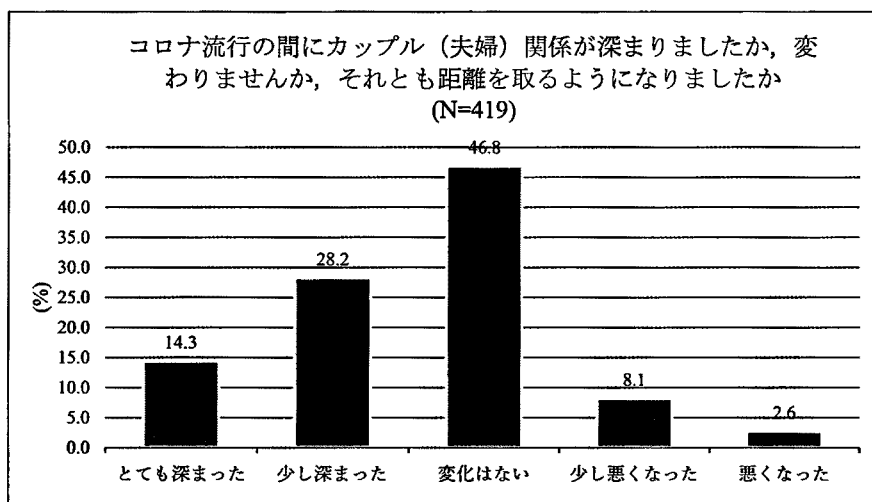


図2 コロナ流行の間のカップル（夫婦）関係の変化調査1

くも悪くもなく変化もない」が17.8%、「関係性が悪くなった（少し距離を置くようになった（少し悪くなった）+距離を取るようになった（悪くなった）」は10.0%、「もともと悪くて変化はない」は2.1%だった。両調査とも、カップル（夫婦）関係が深まった人たちの割合が高いことがわかった。

年齢別に見ると、両調査とも、40代、50代以上よりも、20代、30代の方が、カップル関係が深まったという回答の割合が高かった¹³。

また、調査2には、交際期間を聞く項目を追加したが、交際期間が10年以下の場合、「カップル

（夫婦）関係が深まった（深まった+少し深まった）」は36.8%であるのに対し、交際期間が10年以上の場合は23.9%を示し、多少差が見られる。

次の2項で、カップル関係が「深まった」と、「悪くなった」それぞれの自由回答を紹介する¹⁴。

3-2-2 カップル関係が改善した人たち

まず関係性が深まったという人たちが、その理由として、共に過ごす時間が増えたことを挙げる人が多い。仕事の休みが増えたことや、カップルの双方がリモートワークで一緒に過ごす時間が増えたことから、コミュニケーションを取る時間が増えたという。同じ空間を共有することで「夫

13 詳細に述べると、カップル関係が深まったと回答したのは、50代以上は調査1では36.0%、調査2では25.7%、40代は調査1では29%、調査2では22.4%、30代は調査1では58.2%、調査2では36.6%、と20代は調査1では47.1%、調査2では37.5%を示す。両調査では夫婦（カップル）関係が「悪くなった」よりも「深まった」という回答が各年齢層で高いことが目立つ。一方、特に調査1では、カップル関係が「少し悪くなった+悪くなった」を年齢別でみると、19歳以下は18.8%、20代は9.1%、30代は8.7%、40代は15.3%、そして50代以上は6.3%を示す。この結果から、19歳以下と40代が最もカップル関係のリスクを感じる層であることが興味深い。

14 両調査とも、特に「カップル関係が深まった」場合、「カップル関係が悪くなった」よりも自由回答の記入者が多く、情報量も多い。一方、「コロナ以前から性生活がない」、「性生活が悪くなった」ケースでは自由回答が圧倒的に少ない。また、ジェンダー別にみると、女性の自由回答が圧倒的に多く、男性の自由回答は少なく、短く書かれている。

は普段自分が家にいない時に私が何をしているか初めて知ったこともあるようだ」(20代後半女性)と述べた人もいる。コミュニケーションの時間が長くなったことで、会話の内容が変化したという人もいる。「例えば『今日はどんな1日だった?』から、『昨日仕事で悩んでたあれ、どうなった?』みたいに仕事に踏み込んだ話をするようになったのは私達には新しいことだった。」(30代前半女性)。コロナ流行前は、会話を取る時間が不十分だったと気づく人もいる。「会話をしながら一緒に考えたりする時間が(…)自粛生活でその時間が十分に取れるようになり、お互いの今後の生き方、子どものことなど、すり合わせることにより、より良い関係になったと感じている」(30代前半女性)のように。コミュニケーションが増えたことで、夫婦(カップル)関係が「親密になった」(40代前半男性2人)、「互いの理解が深まり」(30代前半女性)、「信頼関係を得た」(40代後半女性)、「心の結びつきが強まった」(40代前半男性)などと表現されている。

コミュニケーションの増加以外に、家事・仕事の形態における変化も、夫婦(カップル)関係が深まった理由として挙げられている。特に、女性の自由回答には、パートナーの在宅勤務によって、パートナーが抱えている仕事のストレスが軽減し、関係性に良い影響を与えているという意見が目立つ。「夫のストレスがコロナ流行以前に比べて減り、精神面が安定しているようでよかった」(20代後半女性)や、労働環境がよくなったため、夫とゆっくり家で過ごす余裕ができ、「スキンシップや会話が増えた」(30代後半女性)などである。仕事がプライベート空間にシフトしたことで、「パートナーの働いている姿を見て魅力的だと感じた」という回答もあった(30代前半女性)。さ

らに、共働きの場合、家事・育児を二人で担いやすくなったことで、関係性が深まったという回答もある。男性も、カップル関係が深まったという50代以上の男性に、「家事を負担する事で、お互いのペースと時間が確保でき」(50代以上男性)、「家族と共通理解をするよう努めた」(50代以上男性)という回答があった。パートナー間の関係が深まった理由として、コロナ流行以前よりも相手の健康や精神衛生に気を遣うようになったことを挙げる人もいる。

調査2の自由回答からは、調査1よりライフスタイルの変化が長期化した分、関係性の変化が複雑であることがうかがえる。パートナーと一緒に過ごす時間・空間を共有するだけではなく、「お互い尊重できるようになった」「互いに成長した」「互いに褒め合う」「よく話す」という関係性の工夫を述べる人たちがいる。ある男性は「家にじっくりいれてしっかり喋れている。その点ではより深いところにまでお互いを掘り下げられていると思う」(30代後半男性)ということから、関係性が深まったと記述している。また、調査1と同様、特に女性に「夫が在宅となり家事育児への貢献が大きくなり、私の余裕ができて夫婦関係は良好になった」(30代後半女性)と指摘する人がいる。調査1と異なる特徴であるが、カップルが時間・空間を共にできるようになったことを基盤に、家事育児の分担の変化、互いの人間性への理解の深化など、カップルの質的な成長がしばしば語られている。

3-2-3 カップル関係が悪化した人たち

カップル関係が「少し悪くなった」「かなり悪くなった」を含めて「悪くなった」と述べた回答者は、調査1では10.7%、調査2では10.0%を示し、

両調査とも他の選択肢に比べて割合が低い¹⁵。パートナーと共に過ごす時間と空間が増えたことは、交際相手との関係性が深まる理由でもある一方、関係性が悪化する要素にもなりうる。自由回答によると、夫婦関係が悪くなった理由として、一緒に過ごす時間が増えたため、喧嘩が増えたことが述べられている。特に女性の回答者には、育児・家事・リモートワークの両立に困難を抱えていることが、カップル関係の悪化に繋がり、「コロナ疲れ」（40代前半女性）と表現する人もいる。男性にも、家庭内ストレスについて次のように述べる人がいる。「コロナよりも子供の世話で夫婦ともに忙殺されている。コロナでひどくはなったと思う」（40代後半男性 出産直後）。

さらに、共働きの場合、互いのリモートワークで仕事がプライベート空間にシフトしたことで、ストレスが溜まるという回答もある。ストレスが溜まる中で、「逃げ場がない」（30代前半女性）ことに不満を感じるという意見もある。「一緒にいることで喧嘩が増えた。これまではお互い出社し、他の人とコミュニケーションを取ることで気が紛れたが、逃げ場がないように感じた」と30代前半の女性は述べている。他にも、「ずっと家に一緒にいるのが耐えきれず、外でリモートワークをしてもらおうことと外泊してくれるように頼み、実際に数日はそうしてもらった。自粛期間は恋愛（会話一性的な関わり）を一切したいと思わなかった。」（40代前半女性）、「私が在宅勤務になったことにより夫といる時間が長くなり、夫が休みの日がつらい。」（40代前半女性）という回答が見られ

る。その他、自粛に関する価値観の相違や、パートナーの不倫の発覚、一緒に過ごす時間が増えたことで、相手から性行為を求められる時間も増え、ストレスに繋がっているなど、多様な原因により関係性の悪化がもたらされている。

調査2では関係性の悪化の要因のひとつとして、自粛疲れを挙げる人が多い。外出できないため、ストレスが溜まり、交際相手との距離を取るようになったと述べられている。距離を取ることによって、「性的接触に誘うことをお互いに避けるようになった」（30代前半男性）と述べる回答者もいる。「お互いに家でずっと一緒にいて、それぞれ外出せずに自分の世界との関わりが絶たれたため、お互いにストレスが溜まっていて喧嘩が増えた。喧嘩が増えたことでセックスや愛情確認の機会も減った。」（30代後半女性）と述べる人もいる。

3-2-4 関係性と性生活の変化の間の相関関係

性生活の変化を聞いたところ、調査1では「変化はない」と答えた男女は46.4%とかなり高い割合で、「以前よりも良くなった」「少し良くなった」をあわせて17.7%、「以前から性生活はなく、変化はない」は18.8%、「少し悪くなった」「かなり悪くなった」をあわせて17.1%程度である¹⁶。

調査2では、性生活が「良くなった」と「少し良くなった」を合わせて14.0%を示す。調査2では、調査1の「変化はない」という選択肢を3つの選択肢に分けたが、それぞれの選択肢の割合は、「もともと良くて変化はない」（30.6%）、「もともと良

15 「関係が悪くなった」割合が低い理由の1つに、社会的・経済的な困難などを抱えている人々が本調査にに応じていない可能性もある。

16 ただし、「変化はない」選択した人の自由回答に、性生活が実際には変化しているコメントも見つかる。

くも悪くもなくて変化はない」(27.5%),「もともと悪くて変化はない」(5.6%)であった。性生活が「悪くなった」割合は6.4%で、「以前から性生活はなく、変化ない」は8.9%を示す。

カップル関係が深まったか、悪くなったかと、カップルの性生活が良くなったか悪くなったかの相関関係を調べた。回答のうち、「以前から性生活がなく、変化もない」「会えない・合意の上でセックスしない」「無回答」を除いた5列の順序尺度を見ると、女性の場合(表3)、5行5列の順序尺度の相関係数はグッドマン・クラスカルの γ : 0.6301 (強い) 正の相関関係がある。男性も(表4)、5行5列の順序尺度の相関係数をみるとグッドマン・クラスカルの γ : 0.6795 正の(強い)相関があることが明らかとなった。ここから、男女とも、セックスレスカップルを別にすると、カップル関係が深まったか悪化したかと、カップルの性生活が良くなったか悪くなったかの間には、強い相関があるとわかる。

調査1の自由回答からは、性生活が良くなった

要因としてさまざまな点が見いだせる。まずは、自粛の影響で家にいる時間が増えたことから性行為の頻度も増え、性生活に工夫をしたことが挙げられている。30代後半の女性は「パートナーの仕事量が少なくなり、お互い家にいる時間が増えて仲が良好になった。セックスも倍以上に増えた。」と回答した。ある30代前半の男性は、「一緒にいる時間が長くムラムラする頻度が高くなった」と述べ、性行為の頻度だけではなく、性的欲求の変化も見られる。中には少数であるが、「アダルトグッズを購入した」(20代後半 性別の記入なし)という回答も存在し、自粛をきっかけとして性行動の枠組みを変えることも見受けられる。また「家にいる時間が増えて性生活について話し合うようになった」(30代前半女性)ことや、マスターベーションの頻度増加も自由回答で挙げられている。

コロナ流行の前から性生活がなかった場合(セックスレス)、緊急事態宣言下において改善した事例も見られる。「セックスレスだったが一度セックスをした」(20代後半女性)、「週に一度は

	(性生活) 以前より良くなった	少し良くなった	変化はなし	少し悪くなった	かなり悪くなった
(関係性) とても深まった	14	7	11	1	1
少し深まった	6	9	30	12	0
変化なし	1	3	35	15	4
少し悪くなった	0	0	3	6	6
悪くなった	0	1	1	0	1

表3 カップルの関係性と性生活の変化 クロス集計表(女性) 調査1

	(性生活) 以前より良くなった	少し良くなった	変化はなし	少し悪くなった	かなり悪くなった
(関係性) とても深まった	9	4	6	0	0
少し深まった	5	6	26	6	1
変化なし	0	4	58	8	6
少し悪くなった	0	0	4	2	3
悪くなった	0	0	0	0	3

表4 カップル間関係性と性生活の変化 クロス集計表(男性) 調査1

セックスをするようになった」(30代前半男性)という回答が得られた。別の回答では、「ずっとセックスレスで、忙しいからだと思ってきたが、時間があるときにもしてもらえず、寂しい気持ちになった。それを相手にも伝え、少しずつ向き合ってくれているのが変化だと思う」(30代女性)と述べられ、自肅がカップルの性生活と向き合うきっかけにもなったケースもある。交際関係の形態が変化した人も見られる。「以前はポリアモリーの恋愛に関心が強かったが、ひとりのパートナーとの関係を深める事の安心感と素晴らしさに気がついた」(20代後半 ノンバイナリー)。

両調査とも、性生活が深まった理由として、家にいる時間が増えたことや、身体的触れ合いが増えたことが挙げられている。調査2ではさらに、パートナー関係自体がコロナ禍で成長したことから、「パートナーとより神聖なsexを深めることができた」(50代以上女性)という記述も見られる。

3-2-5 「性生活が悪くなった」について

性生活が悪くなったという回答では、さまざまな要因が自由回答で書かれている。まず調査1では、プライベート空間がないことが多く挙げられている。このため「性欲が減った」(20代後半男性)人もいるし、性交渉やマスターベーションができなかったという人達もいる。特に、子どもがいる場合プライベート空間がなくなる。このような性行動の制限が、性生活が悪くなることに繋がっている。また、プライベート空間が減ってカップル間で過ごす空間が増えたことが、性生活を悪化させると捉える回答者もいる。例えば、コロナ流行前に「明日朝早いという理由から(セックス)を断る」ことが可能だったが、「今は断ることができなくなった」(40代前半、女性)と、性生活の

制限をすることができなくなった回答も見られる。プライベート空間の消失という原因は同一であるものの、そもそも性行動をしたいのか、したくないのかによって、性生活を改善するか悪化するかの結果が異なる。

調査2では、調査1と同様な回答も得られたほか、運動不足になり、体型が変化したことでパートナーに魅力を感じなくなった事例もある(30代前半男性)。

両調査から、緊急事態宣言はかなり性行動を制限したことが明らかとなった。制限の中には、風俗に行けなくなったことや、スワッピングができなくなったことも含まれる。不倫相手と会えなくなったり、会う回数が半減したりした人も見受けられる。

「外で性的な体験は求められないので自分を刺激しないよう大人しくした」(調査2 50代男性)

「同居のパートナーとは家庭内別居であり、この状況は変化しない。不倫相手とは会う回数は半減(毎週が隔週に)したが、電話は毎日数回へと増えた(流行前は週に2, 3度)」(調査2 50代以上女性)

「性生活が悪くなった」という人の自由回答には、性生活や、人間同士の接触がリスクとして捉えられたり、コロナ流行中の妊娠を恐れたりする意識も見られる。以下はその一例である。

「身体的な接触到嫌悪感が出るようになった、人と距離を取りたい(…)セックスの頻度が下がった。マスク、避妊具の徹底。行為後のシャワーを徹底。口はどこにも触れない、粘膜の接触は極力避ける、時間を短くする。」(調査2 30代後半女性)

「キスを全くしなくなった。精液でも感染の恐れがあると聞いて、フェラしても精液は飲まなくなった。セックスの回数も減り（相手の体力の問題もある）精液を飲まなくなったため、相手も射精をしなくなった。欲求不満により、アダルトグッズを購入。昔からエロ漫画を読んでいたが、ジャンルが広がった。」（調査2 30代後半女性）

「手洗い消毒などを徹底して、（不倫相手だろうと）特定の人とだけ、セックスや会食など「感染するかもしれない行為」をすれば、それほど恐れることはないと思う。（調査2 50代以上女性）

「赤ちゃんができないように気をつけるようになった。コロナがおさまるまでは避妊したい。」（調査2 30代後半女性）

「妊娠したいけど、コロナで出産が難しいので踏みとどまった結果、性的なことがサッパリできていない」（調査2 30代前半女性）

「今パートナーが妊娠したら困るのではないかという思いが強まった。（…）将来を左右するようなテーマについて話さなくなった。」（調査1 30代前半男性）

3-2-6 同居していないカップルについて

緊急事態宣言によって、同居していないカップル（夫婦）は突如、交際相手との身体的距離を経験し、ビデオ電話や電話、ラインでのコミュニケーションを中心とするようになった。両調査とも、同居していないカップル（夫婦）は自粛生活中に多様な困難を抱え、「関係性が深まった」という回答よりも「少し悪くなった」、「変化はない」という回答が多い。

まず調査1の、関係性が「少し悪くなった」「変化がない」という回答者の自由回答を見ると、自粛中、互いに直接会えないことや、連絡の頻度が

減ったことから関係性が悪くなり、喧嘩が増えるケースが見られる。他に、実家に戻ったことから、家族との会話が増え、恋人との会話をしたくなくなり、パートナーとの「連絡が必要なくなった」と語る回答者もいる（20代前半女性）。

だが、同居していない人の中に「関係性が深まった」という回答も見られる。関係性が深まった回答者には、交際相手との連絡を頻繁に取り、互いの親密性を保つようにしている共通点が見られる。例えば「毎週時間を決めて連絡を取る」（19歳以下女性）、毎日電話し、その結果「お互いの愛は深まった（…）こういう事態において、彼がどういう行動をするかも知ることができたので、彼とこの先も一緒にいたいと思えた」（20代前半女性）などだ。友達と会えないことから、連絡を取る相手は恋人が中心となり、連絡の頻度が上がった人も見られる。コロナ流行をきっかけとして同居を始めたと書く回答者もいる（20代後半女性 2人）。

調査2では、関係性の変化がさらに複雑であることが自由回答から読み取れる。パートナーとはいつまた会えるのかわからないため、「1回1回を大切にするようになった。会えない日の連絡も、喧嘩しないように、お互いがお互いを思いあっている。」（30代前半女性）と、連絡を取り続けて親密性を保つ努力をする回答が見られる。一方、互いに長期間会えなくなり、連絡も減ったことで、交際相手との距離ができた人もいる。「お互いに会うことが少なくなり」（30代前半女性）、または「接触ができないため「性欲はかなり減った」（20代前半女性）という回答は、男女問わず、どの年齢にも存在する。マスクの着用の影響でキスの回数が減り、自粛中にラブホテルを避けることで、性行為が減った（20代前半男性）とも、ある回答

者は述べている。

実際相手と同居していない場合、同じ生活空間を過ごしていないため、いつまた会えるのが予測できない困難がある。その中で、コミュニケーションを取る手段・形態の工夫や、同居しないがための困難が、以上のように明らかとなった。

結果と考察

コロナ流行に伴う第1回と第2回の緊急事態宣言下では、カップル関係及び性生活が悪くなった割合よりも、カップル関係及び性関係が深まった割合の方が高いことが本調査でわかった。コロナ流行以前よりもパートナーと一緒に過ごす時間が増えたことが、さまざまな良い変化を生み出した。つまり、カップルの時間が増えたことが、コミュニケーションの頻度と質を高め、互いへの理解を深めたり、問題に気づいたり、問題にカップルで取り組むことにつながっている。逆に言うと、コロナ前には多くのカップルが、「パートナーと共に過ごす時間がとれない」ことのために、カップル関係を十分深められないままだったのではないかと推察できる。日本のカップルの抱える問題のかなりの部分は、単純に2人の時間と空間をしっかりと作り出すことで解決できるのではないかと。最初の緊急事態宣言下では未知の脅威への不安や生活上の不便も特に大きく、助け合いながら乗り切ることで、パートナーへの信頼感も高まったのだとも思われる。

そして、仕事・家事・育児の領域を共有することで関係性が深まるケースと、共有する領域が増えたことで、関係性が悪化する両方の変化が見られた。

カップル関係・性関係が深まるのか、悪くなるのかという親密度の変化は、カップルの形態にも

よる。パートナーと同居していない場合、親密性を保つための多様な困難がみられる。自粛生活中、実際相手と過ごす時間・コミュニケーションの取り方が変化し、工夫が求められる。負担が増してカップル関係が悪くなるリスクもある。

本調査から、コロナ流行に伴う自粛期間では、様々な性的な制限が見出された。不倫相手に会えない、性風俗に行けない、多様な人と性的な接触ができなくなったなどである。妊娠を控える人たちもいる。身体的・性的な触れ合いを感染リスクと結びつけて制限する人たちもおり、関係性の悪化をもたらす場合もあるとわかった。数は多くはないが、このような自由回答は何人かが書いていた。

性的な制限が見られる一方、自粛中に性的な枠組みを広げ、新しいことを試したり、コロナ流行以前と異なる行動を行ったりする人たちもいる。(大人のおもちゃを買ってみる、マスターベーションが増える、パートナーと性について話す、など)。

従来の研究では「夫婦の親密性については、性交渉の不活発性と夫婦関係の危機が相関関係にあると必ずしも示唆されない」(森木 2017) のように、日本におけるカップル関係の満足度と性生活の満足度との相関関係は強くないと語られてきた。だが、セックスレス・カップルを除いて統計分析すると、コロナ流行下ではカップル関係・性関係の相関関係が認められた。

今回の調査ではセックスレス・カップルを除くと異なる結果が得られたため、日本のセックスレス・カップルと非セックスレス・カップルの相違に着目すると、セクシャリティ研究の新たな発展が期待しうる。パートナーのいない回答者と、パートナーがいるがセックスレス状態の回答者は今回

十分には分析できなかった。セックスレス現象は複雑で、詳細に分析する必要がある、残念ながら紙幅が許さなかった。今後の課題にしたい。

カップル関係と性生活は固定しているものではなく、社会状況によって変化する流動的なものだと考えられる。特にコロナ流行下のような生命の危機の状況では、性関係を含むカップル関係の流動性が表面化し、そのダイナミックな様相が見られている。

参考文献

Jacob, L., et al. Challenges in the practice of sexual medicine in the time of COVID-19 in the United Kingdom. *J. Sex. Med.* 17, 1229-1236, 2020

Hirayama, M., Pacher, A., Klon, W., Waszyńska, K., Selected Aspects of Couple Functioning in Poland and Japan During Covid-19 Pandemic, *Studia Edukacyjne* 63, Adama Mickiewicza University, 81-100, 2021

Lehmiller, J. J., Garcia, J. R., Gesselman, A. N., & Mark, K. P. (2021). Less Sex, but More Sexual Diversity: Changes in Sexual Behavior during the COVID-19 Coronavirus Pandemic. *Leisure Sciences*, 43 (1-2), 295 – 304. <https://doi.org/10.1080/01490400.2020.1774016>

森木美恵「日本における夫婦間の性交渉の頻度と親密性の文化的脈絡」2017, <http://www.paoj.org/taikai/taikai2017/abstract/1049.pdf> (閲覧日2022年2月)

中村淳彦『新型コロナと貧困女子』宝島社新書 2020

Panzeri, M., Ferrucci, R., Cozza, A., & Fontanesi, L. (2020). Changes in Sexuality and Quality of Couple Relationship During the COVID-19

Lockdown. *Frontiers in psychology*, 11, 565823. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2020.565823>

Rothmüller, B., Wiesböck, L., *Intimität, Sexualität und Solidarität in der Covid-19-Pandemie: Bericht über erste Ergebnisse*, Wien: Sigmund Freud Privatuniversität, 2021

Rothmüller, B., *Liebe, Sexualität und Solidarität in der Covid-19-Pandemie: Erste Ergebnisse der Pilotstudie und Folgerhebung 2020*, Wien: Sigmund Freud University Press, 2021

坂爪真吾『性風俗サバイバル—夜の街の緊急事態』ちくま新書 2021

参考サイト

安達知子「新型コロナウイルス感染症流行下の自粛の影響—予期せぬ妊娠等に関する実態調査と女性の健康に対する適切な支援提供体制構築のための研究」厚生労働特別研究「新型コロナ感染症（Covid-19）流行に関連する母子保健領域に関する研究シンポジウム 報告資料 2021年5月15日 <https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/000779764.pdf>

北村邦夫「新型コロナウイルス感染症流行下の自粛の影響—予期せぬ妊娠等に対する適切な支援提供体制構築のための研究」厚生労働特別研究（分担）研究報告書 https://mhlw-grants.niph.go.jp/system/files/report_pdf/20CA2062-buntan4-2_1.pdf

月刊TENGA, 28号 コロナと性生活①, 2020, <https://www.tenga.co.jp/topics/15066/>

明治大学セクシュアリティ研究所, 「コロナと性」, <https://sites.google.com/view/coronatosei/>

NYC Health Department, Sex and Coronavirus

平山 満紀 アリス・バツハー：新型コロナ感染症流行下での日本人のセクシュアリティとカップルの関係性—2020年、2021年の調査結果の分析から—

Disease 2019 (Covid-19), 2020 Mar.21, <https://www1.nyc.gov/site/doh/covid/covid-19-posters-and-flyers.page> Sex toy sales (Smothers, 2020), <https://ja.lovense.com/>

Couple Relationships and Sexuality Among Japanese People in Times of Covid-19 Pandemic: Based on Surveys in 2020 and 2021

Maki HIRAYAMA Alice PACHER

ABSTRACT

Many fragmentary and negative discourses have appeared in the Japanese media about how couple relationships and sexuality have changed during the Covid-19 pandemic. After an overview of previous studies, this paper examines the impact of the Covid-19 pandemic on intimate couple relationships through two online surveys conducted by the authors in 2020 and 2021 in Japan during two emergency states. The authors analyze the survey results on mainly three themes: sexual desire, couples' overall relationships, and couples' sexual relationships. The findings show that many improvements in couple relationships exist during the pandemic and that changes in people's sexual desires during the pandemic turned out to be very complex. This study suggests a strong correlation between couple relationships and couples' sexual relationships and that many couples have improved couples' sexual relationships. This study shows a new perspective to the current discourse among Japanese couple relationships and sexuality.

Keywords: Covid 19- pandemic, Japan, couple relationships, sexuality, online survey